

ほんの些細なこと？ いや、福音の命取りに (2)

—フィリピの信徒への手紙 3章12節～4章1節—

矢野 眞実

3¹² わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。¹³ 兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、¹⁴ 神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。¹⁵ だから、わたしたちの中で完全な者はだれでも、このように考えるべきです。しかし、あなたがたに何か別の考えがあるなら、神はそのことをも明らかにしてください。¹⁶ いずれにせよ、わたしたちは到達したところに基づいて進むべきです。

¹⁷ 兄弟たち、皆一緒に わたしに倣^{なら}う者となりなさい。・・・

4¹・・・このように 主によってしっかりと立ちなさい。

(新共同訳聖書)

前回 (4月) のこのコラム、「ほんの些^{ささい}なこと？ いや、福音の命取りに」の (1) を、筆者は次のような言葉で閉じました。「次回は、いま一つの箇所から、福音の命に関わる読み取りについて考えてみたいと思います」。すなわち、ほんの些細なことに見える事柄が、実は福音の命取りにもなりかねないということ。そのことを、前回は古典的な一例から 御一緒に見たわけです。そこで、今回は「フィリピの信徒への手紙」の3章12節から4章1節をテキストに、そうした危険性に敏感であることの大切さをいま一度 見てみたいと思います。

フィリピの信徒への手紙 3章12節以下といえ、教会では教派のいかんを問わず、広くよく知られた箇所かと思われ、とりわけ3章の13節から14節などは、愛誦^{あいしょうせいく}聖句^{せいご}にしておられる方も少なくないのではないのでしょうか。折にふれて引用されることも多い、そのような有名な箇所です。そして、この箇所がテキストとして用いられるとき、少なからず 次のような点に力点が置かれて語られるようにも見受けられます。つまり、信仰における努力や精進の大切さであり、甘えや怠惰の危険性です。言葉を換えて、向上心や修養^{けんさん}、研鑽^{けんさん}、訓練などといった言い方がなされることもあるようです。いずれにせよ、そのようにして 自^{みづか}らの弱さを克服し、成長・成熟をして、目標目指して

ひた走るといったニュアンスです。

もちろん、信仰においても それらはいずれも小さなことではなく、欠くことのできない事柄と言えるでしょう。実際、今回の手紙の著者であるパウロ自身が「なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ・・・賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです」(3:13~14)と そう語っているのですから、そのことに疑問の余地はありません。ただし、それが万一、一種のガンバリズムに流れ、そこからついには ある種の律法主義になりかねない言い方がなされるとしたら、それはやはり 看過できないことのように思われます。例えば、「目標を目指して追いかけて、全力を尽くすことで、キリストのように変えられる」といったような表現はどうでしょうか。あるいは「目標に向かってひたすら走り抜くことで、神に属する者となることができる」とか、さらには「前に向かう体験をイメージし、心をそちらに向けて走り続ける者となりましょう」とかいう、そのような言い回しはどうでしょうか。つまりは、一方で 自力の行ないによる目標への到達であり、他方で 心持ちの操作による目標への接近とでも言ったらいいでしょうか。そのような意味合いを伝達しかねない勧めの言葉です。しかも、こうした聖書の解き明かしが(時に見られるように)マラソンなどの運動選手の持久の頑張りやイメージトレーニングと結び付けて展開されるとしたら、そこからはいったい、どのような含意のメッセージが発せられることになるでしょうか。

それは すなわち、「本来の主語」が後退し、まずもって受け手であるはずの「受動の主語」がそれを取って代わりかねないということです。どういうことかということ、信仰においてはそもそも キリストが「^{おおもと}大本の主語」であり 事の「第一の主体」であるはずなのに、いつの間にか、この私がその場所に座ってしまう。そして、キリストに突き動かされるがゆえに(すなわち、本来の主語であるキリストが突き動かすがゆえに)自分は前へと押し出されるのに(すなわち、キリストの突き動かしを受けて、受動の主語として前へと向かうのに)、何の思い違いか、自分が自分の努力と精進でひた走るといったような感覚になってしまうということです。そのようにして、キリストの姿がしだいに後退し、その影が薄くなっていく。そして、その分、私という自分の占める比重が大きくなっていきかねません。たしかに、そこには普通、「導きの神を信じて」とか「信仰において」とかいった いわゆる信仰の言葉が付されはします。けれども、それが事を中心にあるものとして 十分な重みを持った仕方では押さえられないとき、私たちは知らずのうちに キリストから目を遠ざけ、その目を自分にばかり向けるようになるのではないのでしょうか。その結果、修養とか自己管理とか、あるいはイメージトレーニングとか積極思考とかいった、私たちの側での手立てが前面にしゃしゃり出るようになるのではないか。そのように思われるのですが、いかがでしょうか。

パウロは、ですから、事の核心たる一事を忘れずに書き留めているのだらうと思います。3章12節の締め^{ひとこと}の一言です。「自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです」と、パウロはそう言います(岩波訳では「捕らえられたからである」。原語のギリシア語は "^{カテレームフセーン}κατελήμφθην^{カタラムパノ}" で、一回性の点的過去を表わすアオリスト形。パウロの ダマスコ途上の回心体験を指す)。この私・パウロは、キリストに捕らえられている(捕らえられた)から、だから 何とかして捕らえようと努めているのだと、そう語るわけです。それは とりもなおさず、小見出しに「目

標を目指して・・・」と記される今回のような箇所であっても、その全体を支える底流として、実にこの一事が貫かれているということではないでしょうか。言い換えれば、この一事こそ、今回の箇所の依って立つ基盤であり、土台であり、事の源泉であるということです。キリストに捕らえられている(捕らえられた)から、だから(そこから押し出されて)捕らえようと努めるのであって、この前段の一事がいつの時もまずもってゴチックの大文字で押さえられねばならないのではないのでしょうか。なぜならば、この順序を軽く見て前段の影が薄くなるような扱いをしていると、ついには、パウロが批判の矛先^{ほこさき}を向けたその相手と同じ落とし穴にはまってしまうからです。パウロの言葉を解き明かしながら、そのパウロの批判の先に自分自身が立たされてしまうという、なんとも笑えない皮肉です。

それは、こういうことです。3章15節の「完全な者」とはパウロの反対者たちの自称で、律法や割礼を重視するユダヤ人キリスト教徒のことを意味しているのは周知のとおりです。フィリピの教会にもそうした人たちがいて、パウロと異なる考えを持っていたことが推察されます。それらの人々に向かって、どこか皮肉な意味合いを込めて「わたしたちの中で完全な者はだれでも・・・」と、パウロはそうのように記しているわけです。どうしてかといえば、彼らが自らの割礼に救いのより所を求め、律法の遵守^{じゆんしゆ}によって自分たちはすでに完全な者となっていると、そう主張したからでした。そのため、キリストの十字架はそこでは重きを置かれません。逆に、十字架のキリストは軽視され、律法のあれこれに努力して励む自分たちのその行ないが重視されることになります。そのような彼らを念頭に、パウロはだから、力説するのでした。「自分はもう完全だというのではない。なんとかして捕らえたいと追い求めているのだ。なぜなら、キリストに捕らえられたからである」と。このように、パウロの主張のポイントは、何より先に十字架のキリストがまずいてくださって、そこで押し出されて初めて、目標を追い求めることが始まるのだということです。だとしたら、私たちがもし、キリストの影を薄くするようなかたちで努力や精進^{こつくべんれい}といった律法的な刻苦勉強を前面に押し出すようなことがあるなら、それはまさに、パウロに批判されたユダヤ人キリスト教徒たちと似た過ちに陥りつつあるということではないでしょうか。パウロの言葉を解き明かしながら、そのパウロの批判の先に自分自身が立たされてしまうというなんとも笑えない皮肉というのは、そういうことにほかなりません。

律法主義への批判を背景に展開されている箇所をテキストに選びながら、気づかぬ間に意に反して、自分自身が律法的ニュアンス^{かもだ}を醸し出し、元々のそれとは正反対のメッセージを伝達してしまう。一見ほんの些細なことに見えることがなんと、そのようにして福音の本質を損なう命取りにもなりかねない。今回の例も、そうした危険性に留意するよう、私たちに注意を促す一例とは言えないでしょうか。

失敗や挫折にもめげることなく、信仰の長距離走をへこたれずに走り続ける。それはそれで、言うまでもなく、価値ある素晴らしいことと言えるでしょう。しかしながら、それがいつの間にか、自分の頑張り^{どつぱ}で自分の力こぶを大きくしよう強くしようという思いに引きずられるようになると、私たちは律法主義の土壺にはまってしまいます。クリアして克服すべき課題ばかりに目が向けられ、達成

すべきノルマばかりに心が奪われてしまいます。そして、キリストが見えなくなり、その十字架が忘れられてしまいます。そこに影を落とすのは律法的なガンバリズムで、その影がキリストの福音をおおかく覆い隠してしまうからです。そのようにして 恩寵^{おんちよう}というものが見失われ、私たちは疲れて、倒れていくのではないのでしょうか。事実、そのような悲しい言葉を目にしたことがあります。キリスト教専門のラジオ局として有名な FEBC (Far East Broadcasting Company) の機関紙に掲載された、愛聴者からの投稿です。それは次のようなものでした。「長い間、お世話になりました。今日は、スタッフの皆様にお礼とお別れを申し上げるためにお手紙を差し上げました。番組を聞き、教会に足を運んで、キリスト教に入信した私です。この一年、自分なりに努力し、一生懸命、信仰を深めようとしてきました。しかし、今はもう やめることにしました。私にとって、イエス・キリストはやはり、重すぎました。負うには重すぎるお方でした。これまで良い番組をお聞かせくださり、本当にありがとうございました。皆様、お元気で頑張ってください」。キリストの恩寵に押し出されるのではなく、自分の力こぶでキリストの倫理を背負おうとされたのでしょうか。それは結局、「負うには重すぎる」ものだったと言われます。たしかに、そのとおりでだろうと思います。なぜならば、そもそも 私たちが主語となってキリストを負うのではなく、キリストこそが私たちを負う主語であって、私たちはそのキリストに押し出されて、十字架の恩寵の中を歩いていくからです。すべては、そのようなキリストを見詰めることから起こされてくるのではないのでしょうか。穴のあくほど見詰めて、そしてそこで捕らえられることから、すべては始まるのではないのでしょうか。いつの時も、そしてどこまでいつでも、そのことがすべての出発点であるように思われます。だからこそ、パウロは言ったのでした。「わたしは・・・何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられている(捕らえられた)からです」(3:12)と。

初めに、疑問に思われる「言い方」とか「表現」とか、あるいは「言い回し」とかいう事柄について触れました。けれども、問題の本質は実のところ、言い方云々^{うんぬん}といったところではなく、もつと深いところにあるのかもしれない。それは、具体的な努力や倫理的な実践というのは私たちにあって分かりやすく、実感として理解しやすいからです。そのため、私たちはそのような方向に引き入れられやすい傾向を体質的に持っているのではないか、ということです。しかし、それは少しでも気を緩めると、福音の命取りにも繋がりかねない危険性を秘めているということでもあります。パウロが声を大にして戒めた律法主義に陥り、自己義認を膨らませてしまう危険性です。私たちは実践倫理の宗教を信奉しているわけではありません。キリストを見詰めることに怠慢な自分自身を反省させられています。

よくよく見てみると、パウロは実際、興味深い巧みな仕方で今回の箇所を展開していることに気づかされます。「目標を目指して・・・」という13節・14節を、2つの「完全な者・・・」という文章でサンドイッチにして記しているということです。そして、その言わんとするところを文脈に沿ってきちんと読み取るならば、それは次のような意味合いになります。「わたしたちの中で完全な者はだれでも」(15)、すなわち 律法の行ないによって自分たちはすでに完全な者になっているという者

たちは皆、「このように考えるべきです」(同)。「わたしは・・・既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです」(12)、目標を目指して走りながら(14)。なぜなら、それもこれも「自分がキリスト・イエスに捕らえられている(捕らえられた)からです」(12)と。つまり、自分たちはすでに完全な者だと言う人たちは、本当はそうでないのだということを知るべきであるというのです。そして、十字架のキリストに目を据え、そこで自分が捕らえられること。目標を目指してひたすら走るのはそのことがあるからこそなのだ、パウロはそう語るわけです。15節の皮肉としての「完全な者」という言葉の裏には、もしかすると「そもそも体の一部を傷つけていながら、完全な者とはそれこそおかしな話では？」といった、もう一つ裏の皮肉も込められているのかもしれませんが。割礼に救いの保証を求めようとした人たちだったからです。少なくとも、切り傷のある信仰的に欠けた者たちというような、そのような含意が込められているのは間違いないと思われます(3:2~3 参照)。さらに言えば、ひょっとすると「完全な者というのはあなた方が考えるような者たちではなく、むしろ反対に、自分が完全でないことを知っている者たちのことをいうのだ」と、そのようないわゆる逆説的なメッセージがそこには置かれているのかもしれない。そのようにも思われています。もしそうだとしたら、それはソクラテスの言ったあの有名な真理、「無知の知」にも通ずるものかもしれません。

自分が不完全な者であることを知る。そして、十字架のキリストに目を凝らして、そこで捕らえられ、突き動かされていく。パウロはこれらのことを身をもって知っていたからこそ、今回の箇所に必要な言葉を挿入し、またそれを次のような言葉で閉じているのではないのでしょうか。すなわち、「兄弟たち、皆一緒にわたしに倣う者となりなさい」(3:17)、「だから・・・このように主によってしっかりと立ちなさい」(4:1)というふうに。それは、不足の自己理解と恩寵の主告白のもと、そのようにして「わたしがキリストに倣う者であるように・・・」(Iコリント 11:1)ということであり、あくまでも「主によって」ということであるにちがひありません。これもまた、信仰義認に通ずるものであり、行為義認に否を唱えるものとは言えるのではないのでしょうか。

.....

- ・ 事の背景を押さえること。
- ・ 文脈を踏まえて読み取ること。
- ・ 論の中心的展開に沿って読み解くこと。

そして 何よりも

- ・ 読み手の主張や恣意を先行させないこと。

今回もまた、そうした点に留意することの大切さを憶えさせられました。どれもが聖書に限ったことではなく、なにがしかの読解をしようとするなら、常に心しておくべき当然のことと言われるそうですが・・・。